

2020 年度 第 9 回講演会 記録

日 時	2021 年 2 月 13 日 (土) 13 : 00～16 : 00
会 場	リモート講演 此花会館梅香殿から ZOOM によるオンライン配信
講 師	神戸大学大学院農学研究科特命准教授 清水 夏樹 先生
演 題	森里海連環から始まる地域活性化
備 考	参加者 152 名 (会場受講 25 名、オンライン受講 127 名) 記録 船本浩路／飯田正恒

はじめに

【田中 克 先生】

清水先生に「森里海連環から始まる地域活性化」というテーマでお話をさせていただきます。森里海連環学が現実の問題に対して非常に大事な解決の道となることを、それを実践通じて実証しないことには、この新たな統合的学問が必要だとの認識が生まれません。その前線で今ご活躍されています、清水先生は 2012 年から昨年の 3 月まで京都大学フィールド科学教育研究センターの准教授を務められ、教育研究両面で多くの業績を残されました。2014 年に清水先生が編者になってまとめられた森里海連環学を世界に発信する英語版の出版にもご尽力されました。日本は森に恵まれた四面を海に囲まれた島国ですから、森里海連環が非常にわかりやすい立地条件にあります。さらに視野を広げれば、地球は 70%を海に覆われていますので、

まさに地球規模でも普遍的な問題だと思われます。地球環境が急速に著しく損なわれつつある今日、日本発の理念と実践の両面を世界に発信するという非常に大事なタイミングであり、世界に日本が貢献し得る確かな道ではないかと思います。本日は森里海連環の基本的な考え方とその実践編的な取り組みをご紹介します。いただけると幸いです。どうぞよろしくお願いします

【清水 夏樹 先生】

今日の演題の頭に森里海連環をつけましたが、私は 2012 年に京都大学に移ってから始めて森里海連環学に取り組みました。その時は田中先生のご本を読んで勉強しました。田中先生の前で森里海連環学をお話するのは恥ずかしい感じがするのですが、少し自己紹介させていただきます。

私は名前に夏樹が入っているせいか、もともと樹木が大好きで樹木の専門家になろうと思って、農学部に入りました。その後、大学院の時に出会った「農村計画学」を専門として長く研究をしています。農村計画学は農村地域を対象として、地域資源を誰がどのように維持・管理すればその地域住民及びその地域から恩恵を受けている人がハッピーになれるかを研究するものです。簡単に言うと地域おこし、村おこしですが、皆さんには地域振興・活性化について研究をしていますと申し上げます。

今なぜ地域振興・活性化を研究するのか申しますと、地域を振興して元気にしたいというニーズがあるから、そして、そのニーズに応えるような研究をしたいからです。2012 年に、京都大学に職を得た際に森里海連環学に出会いました。それまでの研究テーマである農山村の活性化とか地域資源管理というのは里の環境と暮らし、あるいは人と自然との付き合い方そのものの研究だったので、森里海連環学は比較的すんなり入ることが出来ました。森里海連環学にとっても共感をし、これからその研究をやっていくのだなという気持ちになった次第です。そして 2020 年 3 月まで京都大学の森里海連環学教育研究ユニットに所属し



て、

森里海連環学という新しい分野を国内外に向けて発信する仕事をしていました。私に関わった中ではベトナム、マレーシア、ミャンマー、台湾、特に台湾の方が森里海連環学に非常に高い関心を示されました。国立台湾大学には森里海連環学という講座もできています。そして 2020 年 4 月より神戸大学大学院農学研究科に勤めております。農学研究科が設置している地域連携センターで、大学と地域、現場とのコーディネーターをしております。私の関心は、森や海といった自然とそこに生息する動植物からの恵みをいただくことでこれまで生きてきた人の活動そのものです。研究室での研究には少し限界を感じてしまったので、兵庫県の丹波篠山市に移住をしまして、まさに里のフィールドの中で実践に重きを置いた研究活動を進め、約 1 年が過ぎたところです。

私の日常生活そのものが農村計画そして森里海連環学の研究対象となっています。神戸大学農学部農学研究科は丹波篠山市と東播磨地域にフィールドステーションを持っています。地域の方だけではなく行政、NPO、農業従事者、農村関連のビジネスをしている方の相談も受け付けて、大学との連携を図っています。その他にも大学教育として現地実習を受け持っています。もう一つ大きな役割として、丹波篠山市の地域おこし協力隊と地域との間のコーディネート業務も行っています。

【講演要旨】

1. 森里海連環学、そして「里」とは？

京都大学では 2003 年に京都大学内の森の現地教育研究施設と海の教育研究施設が統合したことをきっかけに、森里海連環学が構想され、スタートしました。その立役者が田中先生でした。この森里海連環学とは森から海までのつながりの仕組みを解明し、持続的で健全な国土環境を保全・再生するための具体的な方策を研究する新しい学問分野です。つながりを研究・解明し、つながりを再生することを目指しています。

森里海連環学は英語名では、Studies on the Connectivity of Hills, Humans and Oceans (CoHHO) と表記されます。森は山、里は人間活動と表現されています。森里海連環学は三つのことを目指しています。

① 異なった生態系のつながりの理解

森林、河川、沿岸、海洋などの生態学の研究は別々の研究者によってなされることが多いが、実際の自然は、森は川を通して沿岸へ、そして海洋につながっています。そこで、それぞれの生態系のプロの知識を横につなげて生態系全体のつながりを理解することが大切です。

② 生態系と人間とのつながりを理解。

二次的な生態系（すでに人の手が加わっており、その維持のために人が関与しなければならない生態系）と人の活動（産業・経済・社会・文化活動など）

③ つながりの分断によって生じた地球環境問題の解決。

人の営みは環境に大きな影響を与えています。そのため森里海連環学は自然科学だけではなくて経済とか法律とか社会のあり方などの文化系の領域も含めた総合科学、統合科学として進められています。森里海連環学の説明にはよくこの図（講演レジメ p.1 図参照）を使いますが、森里海のつながりを表す時、二つのつながりがあります。

（1）空間のつながり

空間のつながりの中で、相互生態系、相互のつながり、これは例えば物質やエネルギーの流れと循環、生物多様性と生物生産、生物と環境との間の相互作用などが対象となる研究です。もう一つは生態系と人間関係のつながりです。例えば産業とくらしに注目すると農林漁業、加工業や流通観光などサービス

業も含めて様々な点で人間社会が生態系に影響を与えていることがイメージできると思います。

それから暮らしのための物資、エネルギー、水、薬、さらには廃棄物なども生態系と大きく関わっています。

人間社会が生態系から受ける恵みのことを生態系サービスといいます。いろんな恵みを受け続けるために森里海のつながりはバランスの良い形に保って行かなければなりません。そのために人の手で森、里山、農地、水路、川、沿岸部にも手入れをしていく必要があります。自然からの恵みを使いすぎてもいけないし、荒れ放題にしても生態系と人間関係のつながりは壊れてしまいます。

森里海連環はこのような空間的なつながりの広がりの中での様々なつながりを扱っています。

(2) 時間のつながり

過去から現在未来という時間の流れのつながりに注目すべきです。過去から現在までの環境の変化について、「なぜ」とか「なに」を問うのも森里海連環学です。例えば「なぜ」という部分、つながりの分断はなぜ起こるのか、分断がなぜ問題なのか、あるいは変化が引き起こすことは何なのか、課題は何なのか、何が問題として表出しているのかを明らかにするということです。

現在から将来を予測することも大事です。森里海の環境、人と自然のつながりのあるべき姿、あるいは成れの果てというのでしょうか、そんなものを予測すること、そして実態とあるべき姿の違いは何なのかというのも問いになります。さらに将来に向けては誰が、どのようにという問いがあります。

明らかになった課題の解決のためにどうすればいいのか、誰がどのように行動すればいいのか、理想的な森里海のつながりとはどんなものなのか、そして今あるつながりを未来に向けて維持していくためにどうすればいいのかという問いもあります。これらの問いに答えるために森里海連環学には先ほども申しましたが、自然科学だけではなく政策学、経済学、心理学、哲学なども含まれます。

そして私の専門分野である、問題解決型、未来提案型の農村計画においては農村や里を舞台としてこのような問題に取り組んでいます。

(3) 森里海連環学における「里」

里にはいろんな意味、イメージや思いが含まれます。例えば皆さんが里という言葉を使うのはどういう時でしょうか。日本人の里に対するイメージは農山村、田舎あるいは昔話に出てくるところ、自然の多いところというものでしょうか。また、里には、人の手があんまり入らない動物とか神様の領域に対して、人が住み暮らすところというイメージもあります。この場合は奥山に対して里山という表現もされます。それから里は「ふるさと」の「里」でもあります。懐かしい場所の一つが出身地ですね。お里が知れるとか里はどこかねという使い方もします。森里海連環学の里の英語訳は Humans ですから、里は山、森林、沿岸、海洋の間にある空間、人が活動する空間で、自然環境と結びついた人の活動も含むことになります。未だに森里海連環学の研究者仲間の間で論争になっているのは、都市は里に含まれるのかという問題で、人間活動が里だとすると、都市ももちろん里に含まれるということになります。都市も里とは少しおかしな風に聞こえますが、私は人と人との繋がりそのものが里から発祥したものと考えれば都市も大きな意味で里と考え、話を進めたいと思います。

2. 多様な里

農村とは一日、一年、一生を通して人の活動と環境との関係が強い空間です。空間に対する愛着心が強いのが、里のなかでも農村部です。

日本の農村空間の特徴ー都市との対比

① 人口密度：一人当たりの広さとゆとりがある疎住空間

- ② 居住空間：自然(太陽・空気・土・水)空間がないと農村は存在しない
- ③ インフラ：施設の利用率が低く投資効果が少ないことから、設置・整備が遅れたり、利便性の低い環境になりやすい
- ④ 定住性が強い空間
- ⑤ 生産と生活の複合的空間

歴史の中で形を変えてきた農村もあります。映像とともにその特徴をバーチャルツアーで紹介します。
(北海道から沖縄県の代表的農山村風景 24 景を映像で紹介)

3. 里（農山村・農林業）がもたらす機能（レジュメ p.3 図を参照）

（1）食料供給

里を里たらしめている農林漁業は、日本全体の経済活動のなかではとても小さな割合しか占めていません。収入が少ない、天候に左右される、肉体的にもしんどい作業です。なので農林漁業を続ける人は減る一方です。しかし私達は食料を得る必要があります。農林漁業の役割りの中で最も重視されるのが食料や生活に必要な資材を供給する機能で、生活の安定・安全・安心の基盤になります。

（2）環境保全

農山村が活力を持ち続けることで維持されている環境保全機能があります。

- ① 国土を保全する機能（洪水防止、土砂崩壊防止、水源涵養）
- ② 環境を守る機能（物質分解、汚染物浄化、大気浄化、気候緩和、生物保全）
- ③ 美しい景観をつくり、守ることで人びとを和ませる

（3）地域社会

- ① 文化を伝承する機能(地域社会の振興、伝統文化の保存)
- ② 保険休養機能（ストレス緩和、体験学習と教育）

これらの機能は、安定・安全・安心に加えて「快適さ」あるいは「幸せ感」を支えるものでもあります。

私達が農村部に住んでいなくてもこれらの機能によってサービスを受ける限り、私達は農山村漁村の振興を支えていく必要があります。

条件不利地域（中山間地域）とは？

農林漁業が主として行われている地域の多くは、条件不利地域あるいは中山間地域と呼ばれています。中山間地域とは、農業と人口密度を指標とした農林水産省用語ですが、現在は一般的に生産条件の不利な地域を指す言葉となっています。

この中山間地域の面積は、日本の国土の中で約 7 割を占めています。

農業という観点から考えると耕地面積の 4 割、農家数の 4 割がこの中山間地域にあります。生産条件が不利である地域でどのように農業振興していけばいいのでしょうか。

都市と農村は相対するものではない

日本人の多くが農山村に起源を持っています。皆さんは都会に住んでいる方が多いと伺っていますが、皆さんのお父さんお母さんが農村出身の方も多いのではないのでしょうか。

統計で見ると団塊の世代の過半数が農村で生まれたと言われています。高度経済成長期以降進学とか就職に伴って都市に移り住んで、そして、結婚して新たな世帯として都市で生活を始めています。盆暮れ正月には農山村の実家に帰省するという習慣は今でも帰省ラッシュという現象として現れています。コロナ

のせいで、今年は帰省できなかったという話も聞かれます。最近農村部に残った親世代が亡くなったとか、高齢化に伴って引き取り同居が進み、帰るべき場所、故郷がなくなってしまった人も出てきています。つまり孫世代に故郷が引き継がれないという状況が生まれつつあります。

4. 日本の農業・農村の現状 ―危機的な日本の農山村―

日本の国内総生産 GDP は 2018 年で約 547 兆円、そのうち農業の国内総生産は 5 兆 6979 億円で GDP に占める割合は 1%です。その一方で、第 1 次産業としての農林水産業ではなくて食品加工業や外食産業の経済的位置づけは小さくはないのです。これらを農業・食料関係産業で括りますと国内総生産は 54.98 兆円になり、結局 10 倍にもなるのです。農林水産業はわずか 10%、簡単に言えば私たちの食べ物につけられた価格の約 9 割は農林水産業以外の産業の経済活動によって付加された価格となります。100 円のハンバーガーの 10 円だけが材料の生産者に渡り、それ以外は流通とか加工とかあるいはスマイルゼロ円のお姉さんに払われているということです。

農業の担い手についてみますと、2019 年の日本の総人口約 12590 万人のうち主に農業を仕事としている人、これを基幹的農業従事者と言いますが、その数は 140.4 万人となり、日本の農業は人口の 1.11%の人が支えているということになります。また、基幹的農業従事者のうち 65 歳以上の人が占める割合は 69.7%で、全体の平均年齢は 66.8 歳まで上昇し、高齢化が進んでいます。

よく聞く「農家人口」という言葉と「基幹的農業従事者」というのは異なるものです。農家の家族の中に農業以外の仕事についている人も農家人口に含まれてしまいます。子や孫に農業を継がせたくないという人が多い中で、これからの農業の担い手がどうなるのか非常に心配なところです。先ほど 65 歳以上 69.7%、平均年齢 66.8 歳と言いましたが、他国の農業従事者の年齢構成と比べると日本の農業を支える人の年齢が非常にアンバランスで、日本だけ突出して 65 歳以上が多いのです(注)。日本の農業の就業人口が減っている理由としては後継者がいない、安い農産物が輸入されるようになって収入が減ってしまったことも原因としてあります。

(注) 2010 年各国の農業従事者に占める 65 歳以上の比率：英 23.7%、仏 19.2%、独 16.9%、米 24.9%に対し、日本 61.1%

食料自給率

これらを背景に、日本の食料自給率はカロリーベースで 37%に低下し、この値は下がる一方です。農林水産省は当初、2020 年までにカロリーベースで 50%にするという目標を立てていたのですが 2021 年になっても達成できていません。それで、期間を 2025 年までに伸ばし目標も 45%に下方修正したのですが、これも達成が難しい状況です。世界的に見ても、先進国の中での日本そして韓国の食料自給率の低さが目立っています。

米の生産コスト

今日の朝ご飯、昼ご飯にお米食べましたか。日本人は 1960 年代には年に約 118 kg のお米を食べていましたが現在はその半分以上になっています。

ところで、テニスコート 1 面（面積は 195 平方メートル＝1.95 アール）でどれぐらいのお米が作れるでしょうか。日本の水田の平均的な収量で試算すると、この面積で 98 kg の玄米（精米にすると 93 kg）が収穫（二人が一年間に食べるお米とほぼ同じ量）できます。

米の生産コストを考えてみます。2018 年度、10 アールあたり全国平均コストは 122,039 円でした。先ほどのテニスコートの広さ 1.95 アールだと 23,798 円必要です。米の生産コストで最も高い割合を占めるのが人件費（31%）で、次は農業機械や機具（25%）です。例えばトラクター1 台を購入し 8 年間使用すると仮定すると、毎年の返済金額はトラクター購入価格の 1/8 で計算されます。所有する田んぼの面積の大小に関わらず、使用する農機はさほど変わらないので、農耕面積が小さければ小さいほどコスト高になります。また水田周辺の設備や水、農道などの使用料金（14%）が必要です。この利用料金は他の農家と同一料金になっています。その他に農薬（7%）、肥料（8%）苗（3%）の購入費が必要です。

米作りの収入

ではこの水田から得られる収入はいくらになるのでしょうか。ここでは農協などの出荷団体と卸売業者との取引の際の価格を使用します。

2019 年度 全国平均 玄米 60 k g の価格 15,775 円（米の相対取引価格速報値 農林水産省公表）

産地	品種銘柄	価格（60 k g）
北海道	ゆめぴりか	16,643 円
新潟県	魚沼産コシヒカリ	21,416 円
京都府	コシヒカリ	16,253 円
京都府	キヌヒカリ	14,937 円
滋賀県	みずかがみ	16,110 円

実際に農家が受け取る金額は米の保管代とか運送費などが差し引かれ上記価格より低くなります。また品種銘柄あるいは同じ銘柄でも産地により価格は異なります。

テニスコート（1.95 アール）の広さで収穫した米 98 kg を全量京都府産コシヒカリとして販売すると 26,547 円になります。この金額からコストを差し引くと純収益は **2,750 円** になります。ちなみに 10 アール当たりの直接労働時間は 23.54 時間、面積が変わっても作業内容は同じなので、テニスコートの広さ＝1.95 アールでも同じ労働時間がかかると考えて時給換算すると農家は 1 時間あたり 117 円の給料でお米を作っている計算になります。通常米農家は広い田んぼを経営していますのでもう少し低コストで生産し、高い価格で売れる米を生産しているかもしれません。ただ、以前はお米の価格は今より高く維持されていましたし、農家が得られる収入ももう少し多くありました。近年は米を含む農作物の価格は下がってきており、農業を続けることへの意欲は低下傾向にあります。

ごはん 1 杯の意味

ここでご飯一杯の持つ意味を別の視点から考えてみたいと思います。ご飯一杯は品種によってあるいは育て方によって異なりますが、ほぼイネ 3 株分です。そのお米を作るまでの過程は、3 月から本格的に田んぼの土作りが始まります。モミを水に浸し、苗作りが田んぼとは別の場所で行われます。一方田んぼでは 4 月になると田起こし、代掻き、畦塗りなどを行って、5～6 月にかけて田植えが行われます。暑い夏に草取りとか畦の草刈り、水管理をしてようやく 9～10 月に稲刈りして収穫し、乾燥させた粳から玄米を取り出す粳摺りをして、玄米あるいは精米をして食卓にのびります。

農業（米作り）は「自然」も生産している

この 3 株の稲は、私達の食欲を満たすためだけに存在するものではありません。福岡県を拠点に活動され

ている「農と自然の研究所」の代表 宇根豊さんは、長年にわたって自然環境を守り育てるための農業について研究し発信して来られました。宇根さんは“田んぼに生息している生き物を指標にする”ことは、田んぼの恵みを知ることになるといいます。農産物（米）だけが農業の生産物ではなく、農業（米作り）は自然も生産しているというのです。例えば、

- イネ一株でおたまじゃくし 11 匹が育つことができる。
- ご飯 3 杯分の広さの田んぼで赤とんぼが一匹育つことができる。

これには、農薬とか化学肥料は地域とか田んぼ 1 枚 1 枚の個性に合わせて必要最低限のものだけを使う環境配慮が必要といわれます。絶対使ってはダメというのではなく、必要なものを最低限使うということです。これらのことは、有機栽培とか環境保全型農業あるいは減農薬、減化学肥料と言ったように農作物の販売の際に表示され、私たち消費者に米作りの過程の情報としても伝えられます。

5. 都市―農山村交流による地域振興

（1）地域おこし協力隊

農村と都市、どちらも里です。モノも人も空気も水もつながっているのになぜか分断が起こっています。

つながりを取り戻すための双方向のつながりを私は交流と呼んでいます。それにはモノ、情報、人の交流があります。交流の担い手は人です。まず今一緒に仕事をしている仲間、「地域おこし協力隊」を紹介します。

2009 年から始まった総務省の制度です。

・都市地域から条件不利地域（農山漁村）に移住した人に、地域おこし活動に従事してもらうための制度。

- ・その地域への定住・定着を図ることが目的です。
- ・地方公共団体が募集し、「地域おこし協力隊員」として委嘱します。1～3 年の任期があり、任期を終えたあとはその地域に定住することが前提です。
- ・地域ブランドや地場産品の開発・販売 P R、農林水産業への従事、福祉、医療などの生活支援等、ミッションはいろいろあります。
- ・2009～2019 の 10 年間で約 5500 人が隊員に。総務省の目標は 8000 人。

隊員の約 4 割が女性で、約 7 割は 20～30 代です。任期終了後約 6 割が同じ地域に定住しています。この制度を活用して農山漁村で夢を叶えたい若者がたくさんいます。丹波篠山市には半学半域型と起業支援型という二つの受け入れ体制があります。

丹波篠山市の地域おこし協力隊

もともと丹波篠山市の地域おこし協力隊は神戸大学との提携の中で始まりました。学生が丹波篠山市に住む前提です。その後、農村に住んでそこで起業したいという人のために企業支援型ができました。

2020 年度は 7 名が地域おこし協力隊員として活動しており、鹿肉の商品化をしている人、草木を用いたアロマトリートメントサロンを開催している人、美味しいパン屋さんの傍ら、下校後の子供達の勉強をみてあげる寺子屋のような場所を開いている人、小学校の校舎を使った宿泊施設を運営している人もいます。

みんなすごく楽しくやっています。

【コーヒースタンド】

(2) 地域資源を生かした交流

私はつながり・交流のためのスタート地点を、「地域資源を活かす」ことに置いています。

○その地域ならではの資源を見つけて活かす。

いうのは簡単ですが一時期のブームに終わってしまわないようにしなければなりません。

○地域資源の所有者が誰か？

この所有は法律上の所有ではなく、誰のための地域資源か、また誰が地域資源を保全管理するのかをさしています。実は農山漁村の里の環境そのものを地域資源と捉えると地域資源は住民のものであると同時に、その恩恵を受ける全ての人のものであるとも言えます。

この考え方と類似した概念として「自然資本」とか「生態系サービス」という言葉が最近使われてきています。地域資源は三つ（**自然資源、植生・生態系、人間活動**）の層（講演レジメ P4 地域資源 3 つの層参照）が連続的に連環したものです。気候とか地形などの自然資源、それに則して植生や生態系が形成されます。それに即して人間活動が促進されたり制限されたりします。人間活動は植生とか生態系に影響を与えます。人間活動がこれらの層を破壊することになれば、維持に欠かせない場合もあります。もの、情報、人の交流においてもこの三つの層を一体的に考えるということが必要です。

地域資源とは？

「地域資源」という言葉はいろいろな意味で使われます。使う人、例えばマスコミ、政治家、商社、デベロッパー、金融機関など、立場により意味が異なることがあります。言葉の定義を重んじる研究分野においても、専門分野、研究者によって意味するところが違います。農業経済の分野で活躍された永田恵十郎先生によると、「地域資源」は「資源」の一部とした上で、経済学における「資源」をつぎのように定義しています。

“資源とは自然によってあたえられる有用物であって、何らかの人間労働が加えられる事によって、生産力の一要素と成りうるもの（経済学辞典）”

永田先生は「地域資源」の特徴をつぎのように述べています。

- ① 非転移性をもつ（その空間だけに存在する資源、移動はできない）
- ② 有機的連鎖性（その地域固有の生態系の中に位置づけられている）
- ③ 非市場的性格（他の場所で切り売りすべきでない）

【記録者注】

地域資源の分類について永田先生、及び清水夏樹先生による分類法の説明あり。記載省略。

(3) 地元学による地域資源の発見

里の目指す姿は、その地域に住んでいる人がこれからもずっと住みたいと思う、あるいは一度都会に出た人が帰りたいと思う、あるいはそこに故郷がずっとあってほしいと思う、そのような地域であると、私は考えます。そのためにまずはその地域に今現在住んでいる人が当事者であり、その地域をよく知っている人が自ら地域振興に参加するような、やる気スイッチが入ることをやっていく必要があると思います。そこで生まれたのが『地元学』という学問です。地元学の考え方は地元のことを地元の人たちが外の人たちの目や手を借りながらも自らの足と目と耳で調べ考え日々生活で文化を創造していく連続行為と定義されています。地元学は奇しくも同じ時期に仙台と熊本の別々の地域で別々の方がほぼ同じことを提唱されました。地域の人が地域のことを地域の将来の為に学び活動するというものです。地元学には大きな三つのステップがあります。今日はその地域ならではの資源を見つけて生かしていく中で見つけの部分、地域住民による地域資源調査について実例をご紹介します。

1) 地域資源調査

地域資源調査には地の人と風の人の両方が参加します。

- ① 地の人とは地域の人のことです。自分の地域の歴史、価値、将来を見直すのですが、それは自分自身の歴史、価値、将来を自分事として考えていただきます。何をしたいのか、何ができるか、これはもちろん地域が主語になるのですが、自分自身の問題として考えていただきたいのです。
- ② 風の人は地域以外の人で、地の人のお話を聞くことがメインの仕事です。そして地の人の特徴を知るのですが、答えは語り手側、地の人側にあります。彼らが何をしたいのか、何ができるかということを考えます。そのために三つの「きく」（どう聞けば、聴けば、訊けば）を駆使して話を聞きます。最初の「きく」は音として捉えて聞く、次の「きく」は耳を傾けて注意して聴く、そして最後に問いを發して訊く、この三つを駆使します。

2) 冬部の里作り

- ① 地域づくり取り組んだきっかけ

冬部地区は盛岡の北部、岩手県葛巻町にあり、平成 12 年に冬部中学校が統廃合で閉校されることになりました。中学校が無くなると地域が衰退していつてしまうとか、閉校後の中学校の校舎の有効活用、高齢化による人口減少の中でどうしたら地域の活気が取り戻せるのかということを皆さんで話し合う場として冬部地域振興協議会が発足し、地域づくりに取り組むことになりました。

- ② 始動ーみんなで歩こう会ー

冬部中学校は冬部地区の人々の母校でもあり、PTA、同窓会でも皆さん顔見知りの人たちです。しか

しどのように地域づくりを進めればよいのかわからず、岩手大学農学部の方に相談しました。岩手大学農学の先生は学生に参加を呼びかけ協力することになりました。

- ③ たまたま岩手で農村計画学会があり、参加していた私も協力することになり、若手 8 人がこの地域を訪ねました。そして岩手大学農学部生と一緒に歩こう会を開催しました。

風の人は学生と私たち農村計画学会の当時の若手の研究者、地の方は冬部の方々です。

「みんなで歩こう会」という名前がついていたのですが、「お宝探し」という名前に途中から変わっています。実際は地域資源調査地域のお宝を探すイベントです。用意するものは、デジタルカメラかスマホと地区の地図をグループで一つ。それからお宝カードは A 4 の紙を半分に切ったものです。お宝探しの中でいつ誰がどこで何をなぜお宝だと思ったかを記入係がどんどん書いてきます。グループでお宝探しに出掛けます。

3) お宝さがし（地域資源調査）に出発

- ① 牛舎から牛の声

牛の声が聞こえました。私たちは都会から来たので、牛がいることでワクワクしますが、地域の人にとっては臭いもするし、お宝というよりは負の遺産だといいます。私は偶然ですが葛巻の牛乳を飲んでおり、そのことを伝えると地域の人が凄く喜び、「いやいや牛乳作りは大変なのだよ」と

話

しが弾み、日常飲んでいるものの生産地がここにあるということからお宝認定しました。

- ② 廃校になった小学校の校舎

木造の古い校舎で綺麗に保存されています。窓から教室を覗くと、この小学校が閉校したその日のみんなの言葉、「ありがとうすごく楽しかった。忘れないで」と黒板いっぱい書いてあります。

その思い出をそのまま残しているこの小学校の校舎はきっと卒業生が訪ねたら懐かしさでいっぱいになると思います。お宝認定しました。

③ 道端の桃

道端に桃がなっていました。勝手に食べたらいけないよねって言うと、どうぞと言われたのでみんなで食べました。普通に道を歩いている人が自由にいただける、これもお宝認定しました。

④ ミネラルウォーター

冷泉が湧いている名前畑地区は、地区の人が汲み上げるためのポンプを設置し、水を持帰り風呂湯に使っています。そのポンプの電気代は 100 L で 100 円、そしてポンプ小屋もみんなで管理。みんなの温泉（冷泉）として、これもお宝認定しました。

⑤ キササゲ

キササゲが玄関の前に生えていました。大きな葉っぱのあるただの木に見えるのですが、腎臓病に効く薬の原料とのこと。お役立ちの木は地域の宝ということでお宝認定しました。

⑥ 他にもたくさんのお宝

- ・水のきれいな沢は自慢の場所で、マイナスイオンいっぱい場所もちろんお宝にしました。
- ・山ブドウを育てている秘密の畑で商品化を狙っていること。この秘密のブドウ畑も認定しました。
- ・この地域には泉がたくさんあります。この泉を守るようにカツラの木が生えていました。このカツラの木の根元の湧き水には皆で作った東屋があり、日々お掃除もされています。大事にしている湧き水を認定しました。
- ・天然記念物のイチイの木があります。樹齢 200 年以上と言われています。一緒に歩いた女性が小学生の頃、かくれんぼでこのイチイの木に隠れて誰にも見つけてもらえなくて泣いちゃった思い出話をされました。その思い出とともにあるイチイの木をお宝として認定しました。
- ・屋根にオレンジ色の花が咲いている凄惨な家、残念ながらこの家は誰も住んでいなかったのですが、
すぐ隣に同様の現役の家がありました。もうすぐトトロの家になってくれると思います。
お宝にしました。
- ・道を歩いていると、どこから来たのとかと声を掛けられ、コーンのお土産をたくさんいただきました。こんな暖かいおもてなしも地域のお宝にいたしました。
- ・道を歩いていると頭に何かついているよって、見ると本物の生きているクワガタです。こんなものが探しに行かなくても頭の上に落ちてくるという環境そのものがお宝になってもらいました。たくさんたくさん見つけてきたお宝はカードに書いていきます。

(4) お宝マップ作成と配布

デジカメあるいはスマホで撮った写真はできるだけ印刷をしてカードに貼って地図に落としていく作業をしました。そして最後に全員が「私の一枚発表会」としてお宝を必ず発表します。これはお宝探し地域資源調査の絶対やらないといけないことのひとつです。そして、この地域資源調査で作ったお宝カードなどを活用してお宝マップを作成します。お宝の分類図とか位置図を作り、お年寄から昔話を聞いて、おばあちゃんの植物図鑑みたいな物も作りました。あと冬場マップ&ガイドというものにまとめ、地区を訪れる観光客の方だけではなくて地域を離れていった、盆暮れ正月に帰省されてくる方々にも配りました。

「冬部にこんなお宝があるよ」を皆に知ってもらいたいとの思いの仕掛けになっています。こんなお宝があることが分かったと、その周辺の環境整備、お掃除をしたりとか、柵の補修をしたりとか、花を植えたり、木を植えたりということを地区の中で皆さん進んでされるようになりました。地域資源調査は外向けにこんな資源があるよっていうのをアピールするためだけのものではなくて地域の方が地域を見直すきっかけとか、地域のために何か出来る事あるかもしれないことに気づく仕掛けになっています。

6. 地域活性化の3つの要素と関係人口（レジュメ p.5）

地域活性化には人、物、金の三要素が必要といわれます。さらに情報とかアイデアをプラスする場合もあります。この三つは、たくさんあること、動いていること、多様であることが必要で、どれか一つ欠けてもいけません。また3拍子揃っていることが望まれます。

関係人口

関係人口とは、「居住人口」、「定住人口」に対し、地域を訪れる、訪れないにこだわらない、第三の人口と言われます。地域との関わり方は人によって濃淡があり、多様な関心を持って多様に関わる人達もひっくるめて関係人口といいます。また関係する地域とは、一人が複数関わるので自治体間で奪い合いにならないです。

関係人口とは具体的にどういう人たちのことをいうのでしょうか。レジュメ p.5 の図「地域への定住志向性」を参照下さい。6段階のステップで一番右上が移住定住ですが、それまでのステップに関わりの段階として示しています。地域と人との関わり方は無関心か、移住定住かの1か0ではなくて、人により濃淡があり、変わることがあることを示しています。行ったり来たりもできるのです。

地域への興味を持つという段階では、特産品の購入とか地域の情報を集めるなどの行動をします。

例えば、みかんはやっぱり有田みかんだなどと、特定の地域の果物を買っている人もここに含まれるかもしれません。美味しいみかんを食べると地域をもっと知りたい、もっと関わりを持ちたい、どんな人が作っているのだろう、どんな風に作っているのだろうか、知りたくなることがあります。これが地域に愛着を持つという段階です。

愛着を持つと行ってみたいくなる、行って見たら人に会いたくなる、人に会ったらちょっと住んでみたくなる。愛着を持つ段階で、ふるさと納税の寄付をする方法もあります。右上の方向に階段を登りつめると移住定住となります。

最近の傾向として「交流移住」、あるいは「二地域居住」という形態が見られるようになりました。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、インターネットが繋がるのであればリモートで仕事出来る社会になりました。農山漁村でのデュアルレジデンス（2拠点生活）、あるいは短期的な移住が見られます。各地域には、いろんな仕掛けが作られてきていますが、実際に農村地域の受け入れ側の人達はどのように都市の人たちと交流したいと思っているのでしょうか。

7. 人の交流に着目した環境の価値の保全

都市と農村交流に取り組んだ農村地域デザインの事例として、環境と観光の良い関係を目指し、都市農村交流に取り組んだ山形県山辺町・作谷沢（さくやざわ）の事例を紹介します。

山辺町は山形市内からほど近く、北部にはニットの工場が多くあり、都会的な暮らしをしている町ですが、作谷沢地区はひと山、峠を越えた山間部にあります。この地区で、都市と農村交流に取り組んだのは吉田朝夫さんと漆山正博さんの二人の地域リーダーです。また、その活動を裏側から支えた県庁職員が3名いて、地元からのアイデアを実現するために、行政担当者が影になり日向になり応援しています。ここにはよ

い

感じの、人のつながりがあります。

地域リーダー達はカラオケ同好会とか地域おこしを考える会とか、お酒を飲む口実を作っては集まっています。そこで出されたアイデアの実現にあたり、例えば宿泊施設が必要だという意見が出ると、農家で夫が亡くなり一人暮らしをしている吉田テツエさんに、「一人では寂しいだろうから民宿をやってみないか、手伝うからさ」などと言葉巧みに誘い、近所のお母さんたちも巻き込んで農家民宿を始めることになりました。

そのための法的な諸手続きや設備改装など県庁職員が指導や協力し、またこの地域に移住してきた建築デザイナーに手伝ってもらって、まさに手作りの観光客誘致が始まりました。

この地区の「道の駅」は、「未知」の駅で、道の字が違います。先ほどご紹介した吉田麻生さんが個人で、

観光案内所兼特産品販売所、そして地区の人のサロンとして自宅前に掘立小屋を作り、そこを「未知」の駅と名付けて人を集めています。店番は吉田さんのお母さんです。ただ近所のおばちゃん達が集まっておしゃべりを楽しんでいる時もあります。地区の公民館前にある広場をイベント拠点にしようとしています。広場は地区に住む人達、建築デザイナー、石材業者さん、造園業者さん、土建業者さんそれぞれの仕事を生かして作り上げたものです。みんなで作ったモニュメント的存在として、地域の人びとに大切にされています。このように、地域の人の実働によって作り上げる活動をグランドワークといいます。

一人暮らしだった吉田テツエさんは、農家民宿「はたざお」の女将になり忙しくなりました。お客が多い時や食事の支度が大変な時は、近所のお母さんたちが応援団として駆けつけます。一泊二食付き 5500 円。縁側でスイカ食べたりとか近所の小川で魚を取ったりとか玄関に入る時に思わずだいまといってしまうような宿です。

この地区をまんだらの里と称し、空間プロデュースをしています。(レジメ p.6 まんだらの里作谷沢参照)「まんだら」とは仏教とか密教から発祥した一つの世界観ですが、地区に伝わる古い伝説とか、自然豊かで

動物や植物、人といろんな神様が共生している里の雰囲気「まんだらの里、作谷沢」といっています。

この作谷沢には湧き水ポイントが多くあり、行政の事業やグランドワークで整備されました。

これらのポイントを廻ることで地区を知ってもらうことができます。このマップは先ほどの道の駅とか町役場で、一部 200 円で販売しています。無料で配布するのではなく、知ってほしい人たち、知りたいという人たちに 200 円で販売しています。結構人気があつてすぐ無くなってしまうということです。

まんだらの里作谷沢を回ってみる

- ① スタートは湧き水ポイント 竜神水です。龍神というだけあつて龍の口から水が出るように作っています。
- ② 湧き水ポイント雷 (いかづち) まで歩きます。ここの湧き水は水量が非常に豊富で、農業用水としても使われ、用水路も整備されています。
- ③ 次に弁財天の湧き水行きます。すこし距離がありますが、途中に「未知」の駅がありますので一休みできますここの湧き水はとってもきれいで、バイカモ (梅花藻) が繁茂しています。途中に上海蟹養殖場があります。

- ④ 弁財天の湧き水から少し戻り、湧き水ポイント御所清水（ごしょすず）まで行きます。
畑谷地区の中心部に来ました。畑谷城跡があります。城跡の麓には花の栽培が行われています。
私が訪れたのが夏の終わりだったので秋の花のワレモコウ、リンドウなどが栽培されていました。
- ⑤ 畑谷から県民の森の方向に歩きます。緩やかな登り坂です。こちらに湧き水ポイント亀の子湧水があります。亀の子だけに亀の口から水が出ています。スギとかヒノキの繁る山から湧き出た水です。
この愛嬌のある亀の石像は石屋さんが設置しました。
- ⑥ 畑谷の中心部に戻り、農家民宿「はたざお」で一休みしてから、嶽原へ行く山道、溪流の脇の細い砂利道を登っていきます。嶽原地区には、夏の間だけ野菜を作るために毎日登って来る人もいます。溪流の水は冷たいですが色々生物を観察することができました。
- ⑦ 坂道を上りやや平らになった所に、こんもりと茂る木々があります。ひととき大きなカヤの木の
下にコンコンと湧き出るのが五番御神酒の水です。木々が水を守っています。こちらには今は使われなくなった田んぼがビオトープとして整備されています。地元の小学校の児童を中心に茂りすぎたカヤを刈り、木道を整備してビオトープの管理をしているそうです。

地域資源の価値を活かす観光のデザイン

「未知の駅」、「農家民宿はたざお」、「はったらモア広場」などは、地元のひとのアイデアと労働力の提供で整備されました。運営も地元の人が行なっています。行政がなんとかしてくれるのを待つのではなく、自分たちでやれるところまでやってしまおうとするのが、この地域の特徴です。地域の人たちの手作りの働きにより作り上げる活動を「グラウンドワーク」と紹介しましたが、これをイベント化することで地域内だけでなく地域外の人参加しやすくなります。

もう一つのこの地区の特長は、トレッキングマップがとてもよくできています。一つ一つの点は観光客を惹きつけるには弱いかもしれませんが、点と点を結び空間としてプロデュースすることで一日中、あるいは宿泊しても観光客をとどめて於ける楽しさを提供しています。

トレッキングマップは若い世代だけを対象にするのではなく、いろんな世代に考えてもらい、こども連れ、高齢者、交通手段（車、バイク、自転車）など、それぞれの年代や多様なニーズに合わせてお勧めのコースを用意していますが地図には書き込んでいません。一枚の地図に情報を詰め込まず、現地に行くと言明、対応してくれるひとがいて、生の情報に接し交流することができる仕組みにしておき、心にくい演出をしています。

作谷沢地区が作ったトレッキングマップ「まんだらの作谷沢」は好評で、他地区でも作りたいとの声が上がりました。これに対し受託作成ではなく、隣接市町村を巻き込んだ「狐一巡り街道」構想をつくり地区の人びとに働きかけ、自ら動く人を増やそうとしています。

地域資源を活用した観光のデザインは、3つの層（人間活動、植生・生態系、自然資産）の連環が消えないようにすることが大事ですが、それぞれの価値を損なうことなく地域の人びとが楽しみながら地域資源を活かす意味で、「地元学」を活かしており、参考になる事例です。

8. 森里連環学が生み出す人の交流 ～京都大学フィールド研の取り組み～

京都大学フィールド科学教育研究センターに在籍していたときから、高校生を対象に森里海連環学を自分事として考えるためのワークショップを行っています。私は昨年10月には神戸大学に移っていたのですが、

京大の仲間たちと一緒にテーマ討論をオンラインで行いました。

森里海連環学をベースに非常に大きなテーマである「持続可能な未来」を6つのグループに分かれて討論しました。森里海連環、森里海のつながりによる恵みあるいはその分断によって起こった課題を自分事

として考えられるかどうかを到達目標としました。このイベントには全国から 11 校 31 名の生徒が参加しました。グループワークをオンラインで、ぶっつけ本番でするのはさすが無理だと思ったので、事前に Slack というソフトの掲示板を使い自己紹介とか意見交換をしました。

6 つのグループに共通のテーマとして「私の残したい風景」を課題として出しました。この Slack を使ったの掲示板への投稿は、高校生は結構お手のものなのです。写真もアップしてくれました。「いいね」を押したり、コメントしたりしてリアルで会えない中でもいろんな形でコミュニケーションをとっていきました。オンラインのワークショップの当日は事前に Slack という掲示板を使って持ち寄った写真とか言葉をオンラインの別のツールである miro 上のホワイトボードに貼り付けて共有しました。今日の ZOOM のように一つの同じ画面をみんなで見ながら議論を開始しました。グループ 5 は私がファシリテーション（記録者注）を担当しましたが、人をつなぐことで「残したい風景」を残していく方法を具体的に提案しようということになりました。

（記録者注）ファシリテーション：会議や研修、ミーティングなどさまざまな活動の場において、良質な結果が得られるように活動のプロセスをサポートしていくこと。

各人が「私が残したい風景」に関わる人をピックアップします。例えば、森だったら、木を使う大工さんとか間伐する人というような感じですね。高校生は自分自身も含めてその風景を見ていることに関わる人の思いを想像します。どのようにその風景を見ているのだろう、どんな気持ちでその風景を守っているのだろうということを想像していきます。そしてどのようにしてその人と人をつないでいったら実際に風景を残すために行動してもらえるかを考えました。はじめはファシリテーターである私や大学生のアシスタントがサポートしていたのですが、さすが高校生、こういうツールはすぐになれるのです。最終的にはこのグループは 3 種類の人と人との関係を抽出して、つながりの交流を再生し、新たに作り出していくための提案をまとめました。

オンラインならではのツールを使って、人の交流そのものと、人の交流をどのように作り出すかを考えることができました。今オンラインブームというかオンラインでしか中々お会いできない状況ですが、使い方によっては話をしたことを消さずに画面に残しておくことができるのでオンラインも悪くないと思っています。

9. 具体的にどう「ひと」を動かすか？ （京大生を対象の、里に対するアンケート調査結果から）

里の価値や目指すべき方向性を共有するために、あるアンケート調査のツールを使いました。京都大学で学部生を対象に、「あなたの持つ里のイメージはどのようなものですか」と訊ねました。その結果、京都大学の森里海連環学の受講者は、里はとても自然であるというイメージを持っているようです。

形容詞で表したイメージへの回答に加えて、あなたにとっての里はどういうところか五者択一の質問に解答してもらいました。①生まれ育ったところ、②祖父母親戚の家、③旅行で行ったところ、④テレビや映画で見たところ、⑤その他という回答なのです。私はこの同じアンケートを 15 年以上集積していますが近年③と④がすごく増えてきています。里は生まれ育ったところでもなければ、祖父母親戚の家でもない、要は故郷ではないという子どもがとて増えてきているのです。ちなみに⑤その他のところと答えた人は、里は田舎で虫が多く不快なところ、季節に寄り添った生活が送られている場、未知な場所、自分と接点のない場所、遠くにあり都市から離れたところなどの回答がありました。

また農作業体験の有無も尋ねました。体験したことがある人は全体の 83%で、無いという人を大きく上

回りました。これは最近学校で農作業体験が結構されており、科目と言うか教育の中に取り込まれている結果だと思います。ただし、そこで行なわれた農作業体験が本当の農作業体験かと言うとちょっと疑問に思うところもあります。農作業体験のある人の方が、体験がない人に比べて里に対して好ましいと思ったり、力強いと思ったり、持続的とか豊かなイメージを持っている傾向が見られました。

一方で、作業経験のない人は、「単純な」というイメージを里に対して持っていることがわかりました。川の中に入って泳ぎ、川で魚釣りをしたことがありますかとの問いに対しては、川遊び体験をしたことのある人が多数を占めました。川遊び体験のある人は里に対して力強いというイメージを持つ人が多い傾向にありました。最後にあなたが一番長く暮らした場所は農村だと思う、都市だと思うっていうのを二択で尋ねました。これに選べない人が凄く多いのですが、二択でどちらかで答えてくださいってお願いしました。ここでも 10 年ぐらいの間で都市だと思う人の割合が急速に多くなっています。

このようなアンケートを組合せることによって好まれる里のイメージを掴むことができ、イベントの企画や特産品商品パッケージデザインにも役立ちます。また、デザインをした後にそれが本当に成功しているかどうかを確認するためにもこのようなアンケート調査を使います。人と人をつなぎ環境を守るための行動をマネジメントする、そのためのツールの一つをご紹介します。以上で今日のお話を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

【Q&A】

Q 1 : 最近レジリエンス（困難や脅威に直面している状況に対して、うまく適応できる能力）ということばをよく聞くようになりましたが、食料や生活物資の多少に他に、このことに対しても都会より田舎の方がよいように思っています。

A 2 : 何かの問題解決に犠牲的精神で献身的にサービスしてくれる人がいると、物事の処理が早く進みますが、地域の活動は持続的なものです。楽しみながら行うことが大切で、持続的に楽しんでやれる環境を作る人たちが必要という気がします。

Q 2 : パーマカルチャー農園（記録者注）はどういうのがいいのでしょうか

※記録者注 パーマカルチャー：パーマネント（永続的な）とカルチャー（文化）とアグリカルチャー（農業）をかけ合わせた造語。「持続可能な農業をもとに永続できる文化、つまり、人が自然とともに豊かになるようなデザイン体系」のこと（Web より）

A 2 : 私実はよく知らないのです。パーマカルチャー農園をやっている地域おこし協力隊員とよく議論をしているのですが、自然農法とか不耕起栽培とかありますが、先達が考えた農法は自然に負荷をかけない自然の力を活用した農法ということで、真似をするのはいいけれどもそれが、その協力隊員が借りているあるいは買った畑に対して本当に適合しているかどうかというのは、自分で考えなければいけないと……。また、地域の人にその地域の特徴をしっかりと聞きながらやらないといけないと言っています。農業だけではなくて林業も含めて、小さな森里海連環のような農園の中で作物を育てることが私の理解したパーマカルチャー 農園だったのですが。その隊員はインドでパーマカルチャーを学んできたとかでインドの状況とかを教えてくださいしています。

Q 3 : 都市と農村の概念についての質問です。農村を覗いてみると一次産業、自然と関わる仕事をしている人はそれほど多くないでしょう。本日お話しされた農的生活と実際の農村社会は乖離しているのではないのでしょうか。

A 4 : どこを農村と呼ぶか、農村の定義にもよると思うのですがけれども、ただ農的生活についても濃いもの

から薄いものまで、先ほどお話しした関係人口とよく似ていますが、自分自信が畑を作っていないくても畑で取れたものをお裾分けしてもらっているとか、あるいは畑作業に行く人と挨拶をするとか、何らかの形でその農村社会で農作業をする人との関わりを持っていることも農的生活と解釈してもいいのではと思います。また、田んぼを作らない、畑を耕さないと農的生活ではないのだということが今までの固定観念ですが、もうちょっとゆるく考えてもいいのかなと私は考えています。

Q 6：外国で農業に携わる人の年齢が若いのはなぜだと思われますか？

A 6：国柄で農業が儲かる産業である場合や、国内事情で他の産業につけないなど、事情は様々です。日本が農村から若い人がどんどん流出した時期は、農業は悪いものという価値観が流布しました。自分の子供には農業を継がせたくないといわれたが、今Uターンして自分でお米を作っている人は、「確かに農業だけで食べていくのは大変だが、しかし農業との付き合い方はいろいろあり、今は幸せだ」という人もいます。

Q 7：食料自給率が低い日本はこれからどのようにして食料を得ていけばよいでしょうか。

A 7：皆さんが自分はどのように食料を得ていけばいいかということを考えてください。解決策を提示するのが今の私の仕事ではないです。解決策を考える気持ちになってもらうのが私の今の仕事だと思います。

【田中 克先生 コメント】

2007年に京都大学を定年退職して時間的なゆとりが生まれた中で、森里海連環学を提唱以来の4年間にわたる現場での研究教育を振り返り、今後どのような展開が期待されるかを考えました。

森里海連環学を生み出した時の基本的な考えは、すべてのいのちに必須の物質は水であり、その循環がとりわけ重要であるとするのであれば、「森川海連環学」でいいではないかとの議論、森と海との繋がりが本来の形であれば生まれる必要のなかった学問であること、森と海の間の「里」がその循環を壊し続けていること自身が問題であるからこそ生まれた学問であること、などに思いを巡らせました。そして、あらためて、「里」のありよう、人々の（私たちの）日々の営みのありようを問うことがこの学問の本筋だとの考えに至りました。

フィールド科学教育研究センターの立ち上げから4年間必死に駆け抜けた4年後に、研究の前線から退くことになった時点で、「里」のことを考えなければこの学問を深めることはできないとの思いに至り、研究の前線よりは現実の社会でそういうことを大事にした多様な取組みに軸足を置く道に踏み出しました。この間、京大フィールド研の教育研究の現場で頑張っておられる先生方との交流は最小限に控えてきました。もちろん、その後の現役の先生方は森里海連環学をどのように深化されているのかにも大きな関心があり

ました。今日、清水先生のお話をお聞きして、私自身が現場のいろいろな体験から体得しつつある森里海連環学のイメージと大きくは変わらないことが分かり、安心とともに心強く思いました。

2014年に清水先生が編集された英語版の森里海連環学の本の一節を分担執筆させていただいた際にも、里をどう捉えるかが議論になりました。私は、里は今日の清水先生と同じように、都市を含めた捉え方をしていたのですが、その時点では、里には都市は含まれないというのが大勢であったように思います。

森里海連環学の真髄は森と海の“あいだ”に代表される多様なつながりをもう一度丹念に紡ぎ直すことだと考えています。本来的なつながりが維持されていれば、人々が心豊かに暮らせるのに、その場・その時の目先の利益のために、直接・間接の多様なつながりが分断されていった結果、今日のように大きな問

題に至ってしまったと思われます。それをまともな方向に戻すには、圧倒的多数が暮らす都市の人々の価値観が変わることが不可欠です。そういう意味では、都市も含めた里の在り様、空間としての里だけではなくて、そこに暮らす人々の営み（人の在り様）そのものを問うということになります。今日はそのようなことを改めて強く感じました。

そもそも、水がなければ人は生きていけないし、農作物も作れないことから、多くの里は川の流域の小集落から始まり、それらが少しずつ大きくなると村になり町へと拡大して行きます。いくつも大きな河川が集まる下流域に形成される広大な沖積平野（河口扇状地帯）では、東京、名古屋、大阪のようにさらに大きな都市が形成されます。つまり、里の存在は水の存在が不可欠であるという捉え方をすれば、必然的に都市も含まれることになります。

今日は清水先生のお考えを伺えて非常に心強く思っています。清水先生とはシンポジウムで2〜3回お会いしたくらいで、直接意見を交換したことはありませんでした。今日お話をお聞きし、森里海連環学に関わると、こんなにお元気に生き生きと研究教育、社会的活動に展開できるのかとの思いに至り、大変嬉しく感じました。

この間、自然学講座ではたくさんの先生方や現場で頑張られている方々のお話を聞きしていますが、清水先生のお元気な姿を見て私は二宮金次郎を思い浮かべました。京都にお住まいの7代目の子孫当たる中桐万里子さんが古文書から二宮金次郎の実像を掘り起こされています。私たちには小学校の校庭にある柴を背負って本を読みながらの姿がイメージされますが、成人となつてからの二宮金次郎はそれとは全く異なり、江戸時代に小田原藩の飛び地であった栃木県にある農村で飢饉が頻発してたくさんの村人が亡くなった時代に、彼は農業管理者として、救済の命を受けて出かけています。そこで、彼は書物に書いていたことがそこでは全く役に立たないことに気づき、一切本を読まずに、徹底的に現場を観察して記録し続けました。5月に田植えをした後、6月頃にいろんな食物の育ち具合をつぶさに観察した結果から、今年は必ず水不足で飢饉が起こり、死者が出ると判断を下すと、植えていた全部のイネを抜き取って、そこに水が少なくても育つ、おそらくジャガイモなどを植え、それによって餓死者をほとんどださなかったという非常に大きな仕事を成し遂げました。70歳まで現役で活躍されて、自然にすうーとお亡くなりになったようです。当時の非常に厳しい食環境の中で70歳は非常に長寿です。つまり、農作業のように自然に関わる仕事というものは、人々の健康維持にも深くかわり、生を全うできるような潜在的なものがあるように感じます。

農と関る、自然とかかわる生き方もを見直す時代を迎えているのではないのでしょうか。

関係人口とは非常に重要な意味を持つと思いますが、そのことに関して私に思い浮かぶのは、森は海の恋人植樹祭です。私たちのような森里海連環学に取り組む研究者が頭の中で発想したよりも15年も前に現場に生きている人たちは、自然の循環として森と海のつながりは自明のこととし、壊れたつながりをもとに戻すために漁師が山に登って植樹祭を始めました。それが今では三十数年続き、思わぬいろいろな成果が生まれています。6月第一日曜日に、北海道から九州沖縄まで全国から約1500人前後が集まります。参加した人たちはそこで新たな刺激を受け、お互いに情報を交換し、そしてそれぞれの地域に戻り、自分の地元をどうすれば元気にできるか考え、行動されています。年を追うごとに全国的にそういう思いを共有する関係人口が増え、いろんな芽が生まれ始めています。今日の話もそんなことにも繋がるのではないかと思いました。

最後に、共同で地域振興を進めるグランドワークのお話をされました。一般社団法人日本グランドワー

ク協会が東京にあります、その理事の一人が菅原文子さんです。皆さんどなたかわかるでしょうか。気仙沼のお生まれで、同じく気仙沼生まれの菅原文太さんの奥さまです。現在山梨県の北杜市にお住まいで、ずっと前から文太さんと一緒に「おひさまファーム竜土自然農園」を経営され、グランドワーク協会の理事もされています。文太さんには、2011年にラジオ番組「日本の底力」にお招きいただき、森里海連環学と三陸沿岸に建設が計画されている巨大な防潮堤を主題に、30分お話をする機会がありました。その時に後ろに控えて文太さんに「あなた、こういう質問しないといけない」と指示をされていたのが文子さんでした。そんなこともあって、この講座の「森里海のつながり、命の循環」に非常に共鳴していただいています。

今日のお話は非常に多様で、しかも元気の出る内容でした。このような取り組みが各地で深まり、それらが次第につながり始めていることを感じています。これからどんな展開がみられるのか楽しみなのですが、本講座は年20回の座学を据えながら、次年度には自然観察会を再開し、丹波篠山の先生のところにお世話になって、現場でのいろんなことを学ぶ機会があればと願っています。本講座生が丹波篠山の先生の実践に関係人口になり得るのです。丹波篠山の関係人口として具体的に取組めるようなことがうまれば、受講主体の講座から、一歩前に進むことができます。今問われているのは、これまでのように知識を増やす段階から、現実の問題を自分の問題として（自分事として）捉えて、一歩でも前に進まないとい今の困難な状況は切り開けないと痛感しています。今日の座学を機会にして、私たちが丹波篠山の関係人口となり、なにか具体的にもの進めることになれば、非常に嬉しいことです。どうもありがとうございました。

（了）